現代社会に潜むデジタルの「影」を追う

市民のための「サイバーリテラシー」

矢野 直明　サイバーリテラシー研究所 代表

No.130　PC-9801の思い出

パソコンと言えば98の時代があった

かつて日本製パソコンの代表的機種だった日本電気（NEC）のPC−9801が9月、独立行政法人国立科学博物館により「重要科学技術史資料（未来技術遺産）」に選ばれた。実は、私は『ASAH−パソコン』を創刊する前に『おもいっきりPC−98』というムックをつくっており、その好調な売れ行きが雑誌立ち上げに結びついた。98はとりわけ懐かしいパソコンなのである。

国立科学博物館は、2008年以来、科学技術（産業技術を含む）の発達に貢献した製品を年に20件前後選んで登録する作業を続けており、日本最初の電卓とか、ポケベル、ロボット、電気洗濯機、発動機、液晶デジタルカメラなどさまざまなジャンルのものが選ばれている。

ムック『おもいっきりPC−98』

パソコンと言えば98（キュウハチ）と呼ばれた時代があったのである。CPU（中央演算処理装置）は16ビット。ディスプレイは活字しか映し出せなかったし、もちろんマウスもなかった。それでもパーソナル・コンピュータがホビーマシンやビジネスツールから誰もが使える文房具へと変遷しつつある節目に登場、同時にその趨勢を大きくリードした往年の名機だった。シャープ、東芝、富士通などもほぼ時を同じくして、それぞれのパソコンを世に送り出したけれど、98はそのソフトの豊富さで群を抜き、国民的機種としての地位を築いた。最盛期には国内シェア9割以上を占めた。

PC−9801シリーズは1982年10月に発売され、価格は29万8000円だった。メディア（記憶装置）は8インチのフロッピーディスクでハードディスクは内蔵されていなかった。85年のVM2が普及機として有名で、日本語ワープロの一太郎はこのころ出ている。86年5月に発売されたUV2からディスクドライブが3・5インチになった。

私は同僚の三浦賢一君（故人）と2人でムックのASAHIパソコン・シリーズの編集に取り組んだが、その第1号が『おもいっきりPC−98』だった。プロジェクト室の一角にVM2とUV2の2機種を置いた。まだパソコンが文章を書いたり編集したりする道具だとの認識が会社になく、会計用の「事務合理化ツール」という名目で予算請求したのが懐かしい。フロッピーディスクで市販されていたワープロ、表計算、データベースなどのアプリケーション・ソフトをいちいちディスクドライブに差し込んで作業した。98シリーズが累計販売台数100万台に達したのは87年3月、ムック発売は同年5月で、98の人気のおかげでほどなくして完売、ムックとしては異例の増刷までした。

NEC「PC-9801」の写真（上、国立科学博物館・重要科学技術史資料から）と、ムック『おもいっきりPC-98』の表紙

群小メーカーのソフトが競う

ムックおよびその後の雑誌『ASAHIパソコン』のコンセプトは「これからはだれもが鉛筆や万年筆のような文房具としてパソコンを使うようになる。そのやさしい使いこなしガイドブック」というもので、ムックにもたくさんの実用情報を詰め込んだ。

目次には「フレッシュマンもOLもエグゼクティブも今日からPCライフ」という巻頭カラー、98利用者を訪ねた「98の現場」、当時のOSのガイド「M

やの・なおあき／1966年朝日新聞社入社。79年出版局『アサヒグラフ』編集部員。88年『ASAHIパソコン』初代編集長。『月刊Asahi』編集長の後、95年から出版局デジタル出版部長兼『DOORS』編集長。97年総合研究センター主任研究員。2002年朝日新聞社退社。同時にサイバーリテラシー研究所を開設。03年4月から06年3月まで明治大学法学部客員教授。06年4月から情報セキュリティ大学院大学客員教授。07年4月から12年3月までサイバー大学IT総合学部教授。著書に『インターネット術語集ⅠⅡ』（岩波新書）、『サイバーリテラシー概論』（知泉書館）、『総メディア社会とジャーナリズム 新聞・出版・放送・通信・インターネット』（知泉書館、2009年度大川出版賞受賞）など。最新刊『IT社会事件簿』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）では、ITの進化により引き起こされたさまざまな事件事故の真相に迫っている。※右写真

【5分間のサイバーリテラシー公開授業】 2014年1月から、オンライン無料講座の仕組みを利用し、「サイバーリテラシー」に関する一コマ5分間の授業を公開中。「IT社会を豊かに生きるために～社会編」は「サイバーリテラシーとは」「情報倫理について」「Web2.0とは何だったか」など、「『IT社会事件簿』を読む～事件編」は「遠隔操作ウィルスで誤認逮捕」「米政府による大規模諜報活動告発」「東日本大震災とソーシャルメディア」などのタイトルで公開中。サイバーリテラシー研究所のサイトからアクセスできる。

●サイバーリテラシー研究所　http://www.cyber-literacy.com/

S-DOSこれで十分」などが並んでいるが、力を入れたのがアプリケーション・ソフトのガイド、「失敗しないソフト選び」だった。いまふりかえって興味深いのはその品ぞろえの多彩さである。

ワープロと表計算ソフトのリストのみ列記してみると、

【ワープロ】一太郎、TheWord、オーロラエース、創文、ユーカラart、松86、デスクup、テラⅢ世、QUEEN-Ⅱ、小次郎98／武蔵98、美文、しのぶれど、HuWORD、弘法Ⅱ、TWINSTAR2（表にリストアップしたものはほかにもある）

【表計算】Lotus1-2-3、MicrosoftMutliplan、SuperCalc3R2、HuCAL16、TheFile

いまのスマートフォン・ユーザーには何の感慨もないだろうが、当時を知る人にとっては懐かしい名前ではないだろうか。ソフトメーカーは、ジャストシステム、アスキー、大塚商会、エー・アイ・ソフト、管理工学研究所、ダイナウェア、日本マイコン販売、ビー・エス・シー、ロータスディベロップメント、マイクロソフト、ハドソンなど、これもなつかしい名前が並ぶ。ソフトウエアの世界はまだ寡占が出現せず、小さな会社が特色あるソフトを工夫して出していた。基本的には1MBのフロッピーディスクに収容して市販されるというまことに牧歌的な時代だった（ちなみにアイフォンの容量は16GBとか32GB、あるいは64GBである）。（＊）

パソコンからスマートフォンへ

パソコンはその後、IMBPCと互換性のあるDOSVマシンの時代となり、NEC、富士通、シャープなどが競い合っていた日本のパソコンはグローバル化の波に取り残されていく。デザインの世界などで早くから人気のあったアップルのマック（マッキントッシュ）は、絵も活字と同じように扱えるビットマップディスプレイ、画面上のアイコン、マウスなどの体裁が整い、DOSVマシンもマイクロソフトが1995年にウィンドウズ95を発売するにともない、ユーザーにやさしいインターフェースの時代が花開く。1995年はインターネット元年でもある。ウェブ2・0が喧伝されるようになった2000年ごろがパソコンの黄金期だったと言えるだろう。

いまやパソコンからスマートフォンの時代となり、パソコン業界はいずれも不振である。IBMはとっくの昔にパソコン事業を中国のレノボに売り渡しているし、NECはそのレノボとパソコン合弁会社をつくり、つい最近は富士通もパソコン分野をレノボに移すというニュースがあった。パソコンの時代が終わりつつあるいま、98は歴史として保存されることになったわけである。

パソコンはザウルスだったのだ

イラスト　kkkkkkkkkkkkeeeiiiii

（＊）1GB＝1024MB